

書評

神崎秀陽（編）

更年期・老年期外来ベストプラクティス —誰もが知りたい104例の治療指針—

評：木村 正（大阪大学大学院医学系研究科産科学婦人科学教室）

医学や医療の高度化に伴い専門化が進み、体のパーツにはやたら詳しくならねばならないが、全人的な見地で物事を見ることが難しい時代になってきた。もともと産婦人科医は、妊婦健診という場で妊娠女性の健康問題のすべてに対してたとえ専門的治療はできなくとも診断を行い、それぞれの専門家につなぎ、適切な治療・管理を行うという妊婦の健康のゲートキーパー（門番）の役割を担ってきた。妊娠中であっても感冒や膀胱炎といった一般疾患、高血圧、糖尿病などの生活習慣病、うつ状態などの精神的問題、頭蓋内出血や心不全、甲状腺クリーゼなどの生命にかかわる重篤な疾患までが一定の頻度で発生し、健診を行っている産婦人科医が初期対応を行わなければならない。妊婦健診では「〇〇の臓器しか診ません」という態度・知識では務まらないのである。

このような知識・経験がある産婦人科医がこれからの超高齢化社会に向かって更年期・老年期女性に対しても当然ゲートキーパーとして貢献するべきである。その際に妊婦とは異なる疾患の頻度や、年齢からくるさまざまな問題に向き合わなければならない。また、患者さんたちの意識が高まり、さまざまな診断や治療、あるいは生活指導に至るまで、私たちの行為すべてに根拠を求められることが多くなった。

本書はそのような時代の要請にぴったりと沿った内容である。Q & A形式で実際に患者さんが目の前にいるような臨場感で読むことができる。この年代の女性の訴えは時に複合的、時に相矛盾し

一筋縄にはいかないが、その状況をよく捉えて各質問が構成されており、またキーワードが付けられて全体の理解を助けている。

本書を通読して一貫して感じるのは編者・神崎秀陽教授の、この年代の女性に対する限りない優しさをベースにした構成と、閉経周囲の女性に特有の大きな内分泌学的変化に対する深い洞察である。特にホルモン補充療法に関しては、実際の診療現場で説明に窮するような質問が数多く作られており、それらに対して根拠（エビデンス）に基づいた解決法が記されている。これ以外にも血圧、高脂血症、骨粗鬆症、うつ、不眠、記憶力障害などに関する幅広い訴えが提示されている。婦人科がん検診に加えて、排尿障害、外陰の疼痛、性交渉の問題など産婦人科医こそが対応できるが、なかなか日本の教科書や論文には出てこない項目も多く記載されている。一部に従来の習慣、感覚に基づいた記述がみられるが、これらは改訂版の際にさらに良いものへと磨かれてゆくであろう。

産婦人科医は、生殖医療に始まり胎児、新生児、小児から更年期・老年期に至る女性の一生のパートナーであり、ゲートキーパーであることがその存在の基本である。そのうえでさらに腫瘍や周産期、生殖などの専門性を持つべきである。基本を再構築するために、すべての産婦人科医に一読をお勧めする。

●B5 頁408

定価8,925円（本体8,500円＋税5%） 2012年
[ISBN978-4-260-01533-2] 医学書院 刊